カンボジアスタディツアーから学んだこと

京都教育大学附属高等学校 2 年生　Miyu S.

私は第 8 回高校生カンボジアスタディツアーに参加し、7 月 30 日から 8 月 4 日までカンボジアを訪れました。この 6 日間を通して現地の状況を見て学び、自分の考えを深めることができました。現地では、在カンボジア日本国大使館や UNESCO プノンペン事務所でお話を聞いたり、国立博物館で石像を見て仏教について学んだり、リエンダイ寺子屋で子どもたちと交流したり、カンボジア伝統のアプサラダンスを見ながらご飯を食べたりと、ここには書ききれない程の濃度の高い充実した日々を過ごしました。これらのプログラムから、現地の人々のユーモア、ポルポトを乗り越えてきた歴史、カンボジアと日本の文化の違い、空気や気候の違いなどを学びました。その中でも私が特に驚いた 3 つのことについて記載します。このニュースレターから、カンボジアスタディツアーに参加した意義を多くの方に理解していただければ嬉しいです。

1 つ目　街並みや食事が日本とまるっきり違う

カンボジアに到着して、最初に驚いたことは「日本との街並みのギャップ」です。街の風景や建物が日本とかけ離れていました。看板はクメール語や英語、中国語などで書かれており、カンボジアに来たことを実感しました。さらに、日本よりも車やバイクの量がはるかに多く、なんと 4 人乗りをしているバイクもありました。5 歳ぐらいの子どもでも、お父さんとお母さんに挟まれて、一緒にバイクに乗っていました。

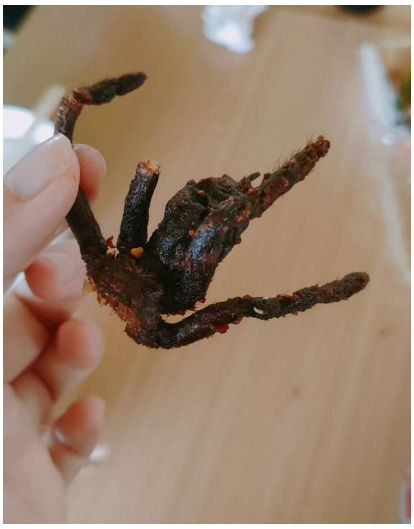
画像 1　カンボジアの風景

画像 2　大人数でバイクに乗っている様子

初めてカンボジア料理を口にしたときも大きな衝撃がありました。日本で見たことがあるような食材も少しスパイシーな味になっていたり、酸っぱい味になっていたりしました。

日本食の味とかけ離れた料理も数多くありました。コオロギやタランチュラも食べる事ができ、一生の経験になりました。今までに食べたことがないものばかりだったので驚きましたが、おいしい料理がほとんどでした。

画像３　カンボジア料理



画像４　タランチュラの素焼き

２つ目　人がおもしろい

現地には「今を楽しんでいる人々」がたくさんいました。

私がこのツアーを通して一番印象に残っているエピソードは、お店の方に腕を引っ張られて、逃げられないようにされたことです。オールドマーケットという、服や小物などを売っているお店がたくさん立ち並んでいる市場に皆で行きました。自由行動になり、メンバーと２人で探索をしているときに、お店の方に日本語で話しかけられました。世間話をしていると集合時間に近づいたので、私は「時間なので、そろそろ行きますね。」と言ってその場を離れようとしました。すると、その人に「あなた、ダメ、待ってなさい。これ買う。」と腕を強く捕まれ、私は動けなくなりました。そのとき、この光景を見た別のメンバーが私の腕を掴み「私たち学生、金ない、手持ちゼロ、無理」と大声で叫び、その人から引き離してくれました。カンボジアで商売をしている人は必死に働いているということを、身をもって体験しました。もう一度オールドマーケットに行く予定があったので、その人の元へ行ってみました。すると、笑顔で迎えてくれ、仲良くなることができました。

また、ご飯を食べにお店に訪れたとき、とても紳士な対応をしてくれた人もいました。私たちが料理の写真を撮っていたら、少し待っていてくれたり、立ち上がる時は椅子を引いてくれたり、笑顔で接客をしてくれたりしました。クメール語が話せず、英語もままならない私たちの注文を真剣に取ってくれました。

他にも、バスに乗る私たちに５歳くらいの子どもが手を振ってくれたり、寺子屋訪問時にはバスから降りた瞬間にハグをしてくれたりする子どもたちもいました。現地の人たちは

笑顔で挨拶をしてくれてとても親しみやすい人々ばかりでした。

画像５　オールドマーケットの様子

画像６　仲良くなったお店の人

３つ目　寺子屋の偉大さ

日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所で、カンボジアの歴史や寺子屋の現状などについて話を聞くことができました。

「教育を受けられないと読み書きができない。

すると安定した職業に就くこともできず、収入が少なくなる」

このような悪循環は世代を超えて続いていきます。カンボジアには悲惨な歴史があります。クメール・ルージュ政権下で、全ての教育制度と教育施設は破壊され、75%以上の教師が虐殺されました。その影響でなんと非識字率が 60%を超えました。今でもその爪痕は残っており、学費が払えなかったり、制服を買うお金がなかったり、家のお手伝いをするために時間がなかったりと、さまざまな要因で学校に通うことができない子どもたちが多くいます。そのような子どもたちにとっての学びの場を「寺子屋」と言います。寺子屋は教育の場の提供の他にも、村の発展の役割も担っているそうです。最近では寺子屋の重要性が広く浸透し、日本の他にも多くの国が支援をしているそうです。

画像７　日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所のブッダ所長にカンボジアの説明をしてもらっている様子

私たちは実際にリエンダイ寺子屋を視察しました。小学校クラスと中学校クラス(LSEP)の教室はクーラーがなく扇風機 1 台のみでとても暑く、明かりも少ない場所でした。そのような過酷な環境の中、20 人程の子どもたちが教科書を開いて、ノートにメモを取り、熱心に勉強をしていました。先生に当てられて、黒板の前で発表をしている子もいました。子どもたちに「何が欲しいか」「たくさんのお金があればどうするか」といった質問をしたときに「ノートが欲しい」「大学に通いたい」といった回答が返ってきました。このように、寺子屋に通う人たちは勉強への熱意を抱いており、物事としっかりと向き合って生活をしていることが分かりました。

日本文化の交流として、白い扇子にペンで絵を描くということをしました。皆、話をしっかりと聞いてくれ、思い思いの作品を作っていました。中には、私たちの名前を英語やクメール語で書いてくれた人もいて、心が繋がれた気がしました。私も、漢字で自分の名前をその子の扇子に書きました。

画像８　授業の様子

画像９　異文化交流での扇子作り

大人向けの識字クラスの視察にも行きました。1つだけの照明で、コンクリートの上にブルーシートを敷いただけの硬く、机も椅子もない場所で、人々は勉強をしていました。男性よりも女性の方が多かったです。その理由は、女性の教育機会が男性よりも明らかに多く奪われてきたからです。教育機会の男女差別を目の当たりにしました。先生が指示棒でホワイトボードを指し、勉強を教えていました。「文字が読めない」ことは日常生活にも大きく影響してきます。買い物をするときや、契約書を書くとき、子どもに言葉を教えるときなどです。私は改めて文字を読んで、理解して、書けることの大切さをしみじみと理解しました。

画像 10　識字クラスの生徒の様子

このようにカンボジアスタディツアーを通して、多くの驚きと学びがありました。日本で寺子屋や歴史、文化などのある程度の知識を入れてからカンボジアに行きましたが、初めて知ることが多く、本当に楽しかったです。オンラインではなく、現地に行って寺子屋の雰囲気を感じたり、現地の人たちと話したりすることができて良かったです。現地の人々と積極的に交流をして、身をもって体験をしたからこそ味わえたものがたくさんあると思います。さらに、ツアーを通して「大切な仲間」もできました。全国各地から選ばれた10名だからこその素晴らしさがありました。自分の特技を活かし、積極的に行動をするメンバーには尊敬しかありません。

私は今回のツアーを通して、一番伝えたいことがあります。それは「自ら別の世界に飛び込んでほしい」ということです。私はカンボジアに行って、今までの常識を覆されました。現地では、ごみが至る所に転がっており、素足で道を歩いている人もいれば、道路で裸になってシャワーを浴びている人もいました。現地の土の質感も気候も日本とは全然違い、異なる点を挙げれば数え切れません。日本から飛び出してまだ行ってみたことのない場所に行くからこそ、分かることがたくさんありました。ぜひ、死ぬまでに一度、日本から飛び出して別の環境に触れてみてほしいです。